

カトリック

広島教区報

No. 87

カトリック
広島司教区

発行責任者
広報担当
原田豊己神父

「点訳版」あります。
お問い合わせください。

広島市中区鞆町 4-42
広島司教区内
TEL (082) 221-6017

クリスマスと新年の

お慶びを申しあげます

カトリック広島司教区長

前田 万葉 司教

新年に幸多かれと祈りつつ

「去年今年貫く棒の如きもの」(高浜虚子)という句がありますが、たちまち年去り年来る感がありました。同時に、私にとつて年月日だけが進み、気持ちは旧年のままといった感じでした。

広島に綱を降ろすや去年今年

あらためて、「クリスマスと新年のお慶びを申しあげます。旧年は司教叙階にあたり大変お世話になりました。皆さまには無礼のまま年を越すことになってしまいますが、新年も相変わらずご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。」と、先ずは年賀状代わりのご挨拶を申しあげます。



前田万葉司教

クリスマスカードも賀状もお礼状

旧年八月、広島に来て初めに感じたことは、アンジェラスの鐘でした。東京でほとんど聞いたことがなかったという、新鮮味だけではない、原爆が落とされた広島の世界平和記念聖堂の鐘だからでしょうか。あるいは、ヨハネ・パウロ二世が平和アピールをした地だからでしょうか。「戦争は人間の仕業です。戦争は人間の生命の破壊です。戦争は死です。」と響いて来るような気がしたのです。

「戦争は死です」と聞くゆ鐘の夏

さて、年末年始のあわただしさの中ですが、静かな一時を馬小屋の前で過ごすことをお勧めいたします。特に家族そろって馬小屋礼拝をすることは、家庭の聖化と福音宣教につながります。子どもの信仰教育は、この馬小屋礼拝の中で、「飼い葉桶のキリスト」、「拝みに来た羊飼いたち」、「三人の博士たち」などの話を通して、「神の愛や私たちの生き方」を教えることによつてできます。親は親で、「人の子が来たのは仕えられるためではなく仕えるために来た・・・」キリストは神の身分でありながら・・・人間と同じ者になりました。ことなどを黙想しながら、お互いに、自分が結婚したのは「仕えられるためではなく仕えるため」であるという自覚を新たにすることが必要です。

前田万葉司教メッセージ
教区の動き
トウアン神学生助祭叙階式
司教団メッセージ
教区災害サポートセンター情報
地区情報・JICA R.M・青少年・ひと粒

一面
二・三画
四面
五・六画
七画
八・十画

飼い葉桶餅と成りしか神の御子

新しい年のしあわせを馬小屋の中に見つけ、仕え合う仕合わせを家庭や社会の中に実現できる良き年となることを祈ります。そして、仕え合う仕合わせを求めて、司祭や修道者を目指す青少年たちが育ちますように祈ります。

東日本大震災支援 地域コミュニティセンター「地ノ森いこいの家」のための献金のお願い

東日本大震災から、十か月を過ぎ被災地も初めてのクリスマスと新年を迎えました。皆さまには、「広島司教区災害サポートセンター」へのご協力に感謝しています。現在、支援の方法も緊急援助から恒常的な復興支援へと変化し、仙台教区サポートセンターは大きく分けて二つの活動を行っています。一つは各ベース(石巻、米川、釜石)を拠点とした、ボランティアとベース・スタッフによる支援活動です。そしてもう一つはカリタスジャパンが中心の、公益性の高い団体に対しての経済支援と、震災により仕事を失った、農漁業(沿岸部の基幹産業) に対しての産業復興支援です。
*また、「広島教区報八十八号」でお知らせしましたが、大阪教会管区として大船渡教会近くに復興支援の設備を備えた「地域コミュニティセンター」を建築して、この度「地ノ森いこいの家」が正式名称になり、今年一月十四日(土)に開所式が行われました。
これからの支援の中心となる「地ノ森いこいの家」のために、大阪教会管区全体で募金活動を行っています。広島教区は、各小教区からの募金を「広島司教区災害サポートセンター」で集計して送金したいと考えています。特別に募金箱を設置してくださり皆様に募金の呼び掛けをお願いいたします。広島教区への振込は、広島教区の振り込み用紙に「サポートセンター」と明記してください。よろしくお願いいたします。

広島教区長 前田万葉 司教
担当司祭 原田豊己 神父
(教区災害サポートセンター情報は、七面に掲載)

*注 大阪教会管区は、広島教区・高松教区・大阪教区・京都教区・名古屋教区の5つの教区で構成されている。

教区の動き

二〇一一年度(第一回) 広島司教区宣教司牧評議会開催

二〇一一年十二月十一日、前田司教着座後初めてとなる広島司教区宣教司牧評議会(以下、教区宣司評)が、広島カトリック会館多目的ホールで開催された。前田司教、司祭、修道者、信徒の二十五人が出席した。

まず前田司教から「停滞気味の推進本部の状況を打開すること、召命のこと、東日本大震災に関する管区としての具体的な活動のこと、を前向きに実施していかないといけない。有意義な会議となるように。」と挨拶があった。

議題は、まず広島教区と



教区宣教司牧評議会の様子

しての共通課題である「平和の使徒となろう」の意識化、「ガイドライン見直し版」の発刊と周知化、平和の使徒推進本部・推進チーム・各地区・ブロックの活性化について出席評議員が話し合った。

教区民からの意見として、「平和の使徒となろう」

「ガイドライン」が、あまり浸透していないとの声が寄せられていることに對し、次のような現状と提案について評議員から意見が出た。

- ①各教会、各地区に対し、今後どのような取り組みを行うって「意識化」するかを問うことが必要。
- ②各教会、各地区には相違や差があるため、様々な課題をひとつずつ取りあげることは困難。少しずつでも

具体的に行動する。
③信徒の高齢化により、なかなか理解してもらえないため、教会のリーダー、地区のリーダーがまず勉強して、少しずつ信徒に伝えていく。

④信徒から意見を出してもらうよう呼びかけても反応が薄いため、ガイドラインの簡略版を作成し、既にも実施している教会活動の取り組みのための一助にする。



平和の使徒推進本部

どもの人数が年々減少している現状について、どうしたら変えることができるかを真剣に考え、司祭、修道者が相談窓口になることが必要。

④忙しい時代の中、基本的に祈りがなく、家族で祈ることができない現状を召命以前の問題として捉え、祈りの機会を作り、ジュニアリーダーの養成とバックアップに注力することが必要。

【災害サポートについて】

これからの広島司教区災害サポートセンターの活動は、単にボランティアするというだけでなく、ボランティアとは何か、キリスト者としてどう向き合おうか、ということを学ぶ機会と意識化のための「研修の場」にしたい、との提案がされた。

この提案を教区の三本柱(特に「きょうどう」を中心に)の中で恒常的に支援していくことが確認され、本評議会にて承認された。

広島教区が属する大阪教会管区は、岩手・大船渡ベースを支援することが決まっております。具体的な支援の内容や募金の活用状況については、今後、いろいろな形で周知する予定とのこと。また前田司教から、広島司教区災害サポートセンターに集まった募金の一部を大阪教会管区(大阪大司教区)に募金したいとの提案があり、本評議会にて承認された。

最後の議題は、「二〇一一年度教区年間サブテーマ」について話し合われた。

ここ近年、年間サブテーマが設定されてきたが、テーマの必要性も含め、設定の是非について話し合われた結果、前田司教の決定に任せることとした。

最後に、前田司教から総評として次のことを話された。

- ①二〇一二年は、教皇が提唱された「信仰の年」である。信仰について話し合うことを検討したい。
- ②十二月三日は、日本の宣教の保護者である聖フランシスコ・ザビエルの祝日で

あるが、ザビエルを広島教区の宣教の保護者としてもいいのではないか。

③「平和の使徒になろう」を根付かせるためには、まず司祭が把握し、具体的なビジョンを打ち立て、信徒に方向性を示し、小教区で具体化し実施する。その内容を持ち寄り、新たなサブテーマを作る段階である。基本は仕えられるためではなく、仕えるために。

④司祭の召命も大切であるが、洗礼の召命が大切。司祭同士、信者同士が対立するのではなく、相手を活かし尊重する生き方、雰囲気を作っていくことが、召命につながっていく。

⑤まず小教区で、家庭で「平和の使徒となる」ことが基本。これができることなく「平和」はあり得ない。まず自分の足元の平和を築いていくことが目に見える平和につながる。

⑥教区はこれからどう生きるか。司教と修道者・教区司祭が「きょうどう」して、召し出しのシステムを早く作り上げる必要がある。中学生から育ててもいい。募

集もしよう。恐れてはいけない(金銭面も)。信仰をもってプラス思考で考えていこう。

以上のことが話し合われた後、祈りと祝福のうちに教区宣司評を閉会した。前田司教のもと、新たな年と共に、教区民一人ひとりが「平和の使徒」になることをめざして歩みましょう。そのためには私たち一人ひとりの意見も必要です。質問や要望などは、平和の使徒推進本部まで。(平和の使徒推進本部)

死者の月 教区廿日市墓地でミサが行われる

二〇一一年十一月十三日(日) 十四時、うす曇りの中、広島県廿日市市にある広島教区の墓地、カトリック廿日市霊園で、司祭、修道者、信徒及び親族およそ二百名が参加し、ともに死者を追悼するミサが捧げられた。司式は、前田万葉司教。前田司教は、ミサの説教で、司教の出身地である長崎県上五島での子どもたちのエピソードを交え死

者のために捧げるミサの重要性を説いた。



教区殉教地・巡礼地 ネットワーク 第三回全体会議開催

二〇一一年十一月五日(土) 開府四百年祭で賑わう松江市の松江教会において、教区内の殉教地巡礼地を抱える教会から十六名が集い、最近の各地での活動状況や今後の会の有り方等を話し合った。この会は教区内の殉教地等の活動をもっと広く知らせようと



二〇〇三年に発足したもので、すべての個所を網羅した「案内冊子」を発行し、教区のホームページ等でも広報している。今回はその担当者全てを対象に開催する会議で四年に一回各地で

行っている。議事を前に松江教会信徒から郷土にまつわるキリシタンの話を聞き、翌日は現地学習も行い見聞を広めた。なお今年六月八日は日本二十六聖人の列聖百五十年にあたり、長崎を始めとして各地で祝賀行事の開催が予想される。広島教区も京都からの「長崎への道」のルート上にも当たり、トマス小崎とディエゴ喜斎の二聖人の関係個所でもあるため、今後ネットワークも教区に協力し、啓発と祝賀行事の計画を検討していきたい。

平和アピール 1981 記念講演会

元原子力プラント設計技術者が語る
原発に完全な安全システムはない
～失敗が許されない技術～

講師 工学博士 後藤 政志 さん
NPO 法人 APAST(アバスト) 理事長
元原子力プラント設計技術者
芝浦工業大学非常勤講師

●後藤 政志 さん
1949年、東京都生まれ。工学博士。広島大学工学部船舶工学科卒業。1973年から、三井海洋開発で海洋構造物を設計。1989年、東芝に入社。原子炉格納容器を研究。2002年までに柏崎刈羽原発、浜岡原発、女川原発の設計に携わる。この間、原子炉格納容器の安全性は技術で担保しきれないとの疑念を生じる。2007年7月16日の新潟県中越沖地震に伴う柏崎刈羽原子力発電所の一連の事故のときに、これは決定的にだめだ、技術者として黙っては行かないと思う。2009年、東芝を定年退職。原子炉格納容器設計者の観点から、福島第一原子力発電所事故の分析を行っている。

2012年 2月 19日(日)
14:00 ~ 16:00
場所: 世界平和記念聖堂
(カトリック備町教会)
広島市中区備町 4-4 2
TEL 082-221-6017
エリザベト音楽大学隣

入場料無料
どなたでも参加できます

主催: カトリック広島教区平和推進チーム

トゥアン助祭 広島教区新助祭誕生



トゥアン神学生助祭叙階、

おめでとう！

神学生養成担当

荻喜代治神父

トゥアン助祭は、今日の助祭叙階を迎えるまで長い努力の道のりがありました。私が彼と出会ったのは、日本に来日する前の面接でベトナムに行った時でした。日本語はほとんど話せませんでしたが、熱心に積極的に日本語を使って話しかけてくれたことが印象に残っています。

一九七二年十月二十日ベトナム Daiklak 生まれ、洗礼名ヨハネ。二〇〇三年九月に来日、翠町教会に居住、広島 Y M C A 日本語クラスで一年半学び、東京カトリック神学院（現日本カトリック神学院）に入学。日本語で哲学、神学を学び続けることは、簡単なことではなかったようです。何度も困難な問題にぶつかりながら、ただひたす

ら司祭への道を地道に歩んで助祭叙階を受けることができました。四月から神学院に戻り、最終養成の段階に入ります。叙階式に参加した神学院院长は、彼の努力をほめながらもさらに大きな努力が必要だと、励ましていました。どんなことがあっても「初志貫徹」、司祭叙階までやりとげてくれることを期待しています。

感動の叙階式

翠町教会 信徒会長

吉川弘之

トゥアン神学生の助祭叙階式が二〇一一年十一月十九日翠町カトリック教会で午後二時から開催されました。早朝から降りしきる雨の中で会場の設営が行われ、午後一時過ぎから次々と来られる参列者を迎え、狭い聖堂はまもなく満席になり、あとは外のテントの会場の方へ。参列者は百八十人を超す盛況で感謝しております。
前田万葉司教様司式により荘厳な雰囲気の中で進め



られ、トゥアン神学生へ助祭聖別の祈りが終わると、感動に胸が厚くなりまし。翠町教会の信徒一同が待ちに待ったこの瞬間でした。七年前慣れない日本に来て習慣、文化、特に言葉には大変な苦勞があり、翠町教会信徒もアドバイスをしながら一日も早く助祭となることを祈る毎日でした。

トゥアン助祭には今日の喜びをしつかりと胸に刻み、司祭叙階にむけて一所懸命、精進努力されて、一日も早く念願が成就されることをお祈りします。どうぞ健康に気をつけて頑張って



ください。最後に叙階式を支援していただいた一粒会の皆様、そして多くの参列者の皆様に感謝申しあげます。

いまずぐ原発の廃止を 〜福島第一原発事故という

悲劇的な災害を前にして〜

司教団のメッセージ発表される

日本の司教団は二〇一一年十一月八日、仙台市内のホテルで第二回特別臨時司教総会を行ない、東日本大震災による原子力発電所の事故に関するメッセージ「いまずぐ原発の廃止を〜福島第一原発事故という悲劇的な災害を前にして〜」を採択し、仙台教区カテドラルで発表した。

司教団メッセージの全文

いまずぐ原発の廃止を
〜福島第一原発事故という
悲劇的な災害を前にして〜
日本に住むすべての皆様へ

東日本大震災によって引き起こされた福島第一原発の事故により、海や大地が放射能に汚染され、多くの人々の生活が奪われてしまいました。現在でも、福島第一原発近隣の地域から十万人近くの住民が避難し、多くの人々が不安におびえた生活を余儀なくされています。

原子力発電の是非について、わたしたち日本カトリック司教団は『いのちへのまなざし―二十一世紀への司教団メッセージ』のなかで次のように述べました。

「(核エネルギーの開発は)人類にこれまでにないエネルギーを提供することになりましたが、一瞬のうちには多くの人々のいのちを奪った広島や長崎に投下された原子爆弾やチェルノブイリの事故、さらに多くの人々のいのちを危険にさらし生活を著しく脅かした東海村の臨界事故にみられるように、後世の人々にも重

い被害を与えてしまうことになるのです。その有効利用については、人間の限界をわきまえた英知と、細心の上に細心の注意を重ねる努力が必要でしょう。しかし、悲劇的な結果を招かないために、安全な代替エネルギーを開発していくよう希望します。」

このメッセージにある「悲劇的な結果」はまさに福島第一原発事故によってもたらされてしまいました。この原発事故で「安全神話」はもろくも崩れ去りました。この「安全神話」は科学技術を過信し、「人間の限界をわきまえる英知」を持たなかったゆえに作りだされたものでした。

わたしたちカトリック司教団は『いのちへのまなざし』で、いまずぐに原発を廃止することまでは呼びかけることができずして、しかし福島第一原発事故という悲劇的な災害を前にして、そのことを反省し、日本にあるすべての原発をいまずぐに廃止することを呼びかけたいと思います。

いまずぐに原発を廃止することに對して、エネルギー不足を心配する声があります。また、CO2削減の課題などもあります。しかし、なによりまず、わたしたち人間には神の被造物であるすべてのいのち、自然を守り、子孫により安全で安心できる環境をわたす責任があります。利益や効率を優先する経済至上主義ではなく、尊いいのち、美しい自然を守るために原発の廃止をいまずぐ決断しなければなりません。

新たな地震や津波による災害が予測されるなか、日本国内に五十四基あるすべての原発が今回のような甚大な事故を起こす危険をはらんでいます。自然災害に伴う人災を出来る限り最小限に食い止めるためには原発の廃止は必至です。

原発はこれまで「平和利用」の名のもとにエネルギーを社会に供給してきましたが、その一方でプルトニウムをはじめとする放射性廃棄物を多量に排出してきました。わたしたちはこ

れらの危険な廃棄物の保管責任を後の世代に半永久的に負わせることになりました。これは倫理的な問題として考えなければなりません。

これまで、国策によって原発が推し進められてきました。その結果、自然エネルギーの開発、普及が遅れてしまいました。CO2削減のためにも、自然エネルギーの開発と推進を最優先する国策に変えていくようにわたしたちは訴えます。また、原発は廃炉にするまで長い年月と多くの労働が必要になります。廃炉と放射性廃棄物の処理には細心には細心の注意を払っていかねければならないでしょう。

確かに、現代の生活には電気エネルギーを欠かすことはできません。しかし大切なことは、電気エネルギーに過度に依存した生活を改め、わたしたちの生活全般の在り方を転換していくことなのです。日本には自然と共生してきた文化と知恵と伝統があ

り、神道や仏教などの諸宗教にもその精神があります。キリスト教にも清貧という精神があります。そして、わたしたちキリスト者には、何よりも神から求められる生き方、つまり「単純質素な生活、祈りの精神、すべての人々に対する愛、とくに小さく貧しい人々への愛、従順、謙遜、離脱、自己犠牲」などによって、福音の真正なあかしを立てる務めがあります。わたしたちは、たとえば節電に努める場合も、この福音的精神に基づく単純質素な生活様式を選び直すべきです。またその精神を基にした科学技術の発展、進歩を望みます。それが原発のない安心で安全な生活につながるでしょう。

二〇一一年十一月八日
仙台にて
日本カトリック司教団

司教団メッセージ「いますぐ原発の廃止を」についてのコメント

1. なぜ、カトリック教会が原発に関するメッセージを出すのか？

原発については、国民一人ひとり、また、様々な立場からその是非について議論されています。採算がとれるかどうかといった経済的な立場、子どもたちの健康や市民生活の安全を守る立場、国際競争力を保持しようとする立場など・・・。

しかし、カトリック教会は原発の是非に関する問題は倫理的な問題、人間の命の問題でもあると考えます。また、私たちはすべての人と連帯して、神の被造物である自然や環境、すべての生命を保護していく責任を持っています。以上の二つの立場から、司教者として原発の是非について発言する責任を果たしたいと考えています。

2. 「司教団メッセージ」について

日本には北海道から沖縄まで16教区があります。各教区にローマ教皇によって任命された大司教、司教、補佐司教が各教区の信徒、諸施設に対する責任を持っています。現在日本の司教は17名。(引退司教は除く)

折々の問題について、これらすべての司教の合意を得たメッセージが司教団メッセージとして発表されます。今回のメッセージは11月8日に仙台で行われた特別臨時司教総会において、全員の司教の合意を得て司教団として発表するに至りました。また、日本のカトリック信徒だけではなく、日本に住むすべての人々に向けた呼びかけとしました。

3. なぜ、今、原発についてのメッセージを発表するのか？

i. 原発事故以来、脱原発か原発存続なのか議論され始めましたが、政府はその国民的な議論を待たずに、なし崩し的に原発存続の方向に進み始めています。再稼働への道を歩み始め、原発技術の輸出交渉なども再開されています。このような時こそ、国民的な議論によって、原発の是非について考えるべきです。そのために、このメッセージを発表することになりました。

ii. カトリック教会の司教団メッセージ『いのちへのまなざし』(2001年)では、脱原発の方向を示しましたが、その存続を容認する立場でした。福島第一原発事故を目の当たりにして、司教団は原発に対するより踏み込んだ明確な姿勢を打ち出すことになりました。

4. いますぐに原発を廃止することができるのか？

2011年の夏、関東、東北では原子力発電が止まり、電力不足が予測されましたが、市民、企業、自治体などの節電努力によって、それを乗り越えることができました。いますぐに原発を止めても、節電によって、電力供給不足は乗り越えられることを証明したと言えます。国際競争力などの点でハンディを負うことにな

るかもしれませんが、自然エネルギーの開発を推進することで新たな国際競争力を育てるようになるべきです。日本の技術力と国民の節電などによるライフスタイルの転換に期待したいと思います。原発事故の被災地である東日本だけではなく、日本全体として脱原発、脱電気エネルギー依存への生活転換が求められます。

5. メッセージの中の言葉の説明

「人間の限界をわきまえる英知」：人間の知識・技術・努力などには限界があり、その限界を知ることが真の英知(真の知恵)です。科学技術の分野においてもこの英知を謙虚に受け入れる必要があります。人間の知識や技術力をもってしても原発は制御できないことが起こりうることは、今回の事故でも明らかになりました。

「平和利用の名のもとに」：広島、長崎における原子爆弾の恐るべき体験から、日本人は核兵器廃絶を悲願としています。この「平和利用」という名のもとに、原発という核エネルギー利用に方向を転換しました。しかし、原発の技術は核兵器開発に容易に利用されることも指摘されています。私たちはこの点からも原発の廃止を考えるべきです。

「清貧」：物や金(欲望)に執着することのない生き方。物や金は不要と考えるのではなく、全ての神の被造物(水、自然・・・)の価値を正しく認め、それを大切に使い、ほかの国や人々と公平に分ち合う生き方。

「従順」：神の望みに従うことを意味します。

「離脱」：物や金や人に関わる利己主義から抜け出し、“所有する(to have)”満足から、“存在する(to be)”喜びへ移行することを意味します。

「自己犠牲」：個人が欲望のままに生きるのではなく、他者・神への愛をもって自らの生活を他者・神のために捧げて生きることを指しています。個人の倫理に留まらず、地球市民として限られた資源や生産物を全ての人と等しく共有し公平に分ち合って生活すること(連帯の精神)の意味も含まれます。

6. 今回のメッセージでは「脱原発依存」だけではなく、「脱電気エネルギー依存」の生活転換を訴えるものです。それが、脱原発だけではなく地球温暖化への対策も含めた地球環境、人間の命を大切にすることになります。

2011年11月10日 仙台において

社会司教委員会

委員長 高見三明大司教

(カトリック中央協議会ホームページより)

東日本大震災支援

広島司教区災害サポートセンター

原田豊己神父

二〇一一年十二月十一日、二〇一一年度第一回教区宣教司牧評議会が開催されました。前田万葉司教は「広島司教区災害サポートセンター」の活動を重要なものと位置づけられました。評議会においてもサポートセンターの役割と活動を司教区の三本柱、特に「きょうどう」の中で、発展させることに合意しました。

に支援を行ってきました。サポートセンター独自の活動は、主なものとして以下のことでした。

- ・司教区で雇用した方を長期ボランティアとして現地に派遣
- ・司教区内で働くシスター・神父を現地に長期派遣
- ・信望愛学園などで被災地からの方の受け入れ
- ・小教区活動のネットワークづくり
- ・現地の情報収集と司教区ホームページを活用しての広報活動
- ・募金活動を通じて、活動グループに対する資金援助
- ・ボランティア参加の情報提供

広島司教区災害サポートセンター収支報告
(2011年4月1日～12月31日)

収入	献金	5,016,228
支出	支出合計	2,050,949
	事務運営費	4,600
	振込手数料	4,600
	旅費交通費	136,670
	支援費(派遣者の経費を含む)	1,909,679
	経費	752,500
	送料	6,740
	物資購入	150,439
	「地ノ森いこいの家」支援	1,000,000
繰越		2,965,279

「広島教区報八十六号」でお知らせしましたが、緊急援助が終わり恒常的な支援活動に大きく変化しています。多くの人々の関心が薄れ、ボランティア参加者の減少、被災された方々の中での格差の拡大、物資・



右、ギャリー神父

ボランティア参加者のばらつきなど、偏りの報告を受けています。そのため、現地の情報収集が不可欠ですし、活動の拠点となる現地での施設が熱望されました。長崎教会管区は、岩手県大槌町にベースを開設しました。大阪教会管区は、岩手県釜石市以南から宮城県石巻市以北を担当し、大船渡教会の隣接地域にギャリー神父を派遣しました。また、ここには一月十四日に竣工した「地ノ森いこいの家」と命名された長期短期ボランティア受け入れ施設があります。各小教区は「顔と顔が見える」支援をされていると思いますが、

広島司教区も大阪教会管区の一員として「地ノ森いこいの家」の運営・活動に責任があります。

風の石巻より

カリタスジャパン

仙台教区サポートセンター

石巻ベース

シスター山本紀久代

広島から来て、東北初めての冬を体験中です。石巻はあまり雪が積もりませんが、芯の強い寒さ。春を待ちわびる気持ちはひとしおです。

いつも、広島教区からたくさんのお祈りとご支援を有難うございます。被災地の状況は、地域によって、また地震の被害か津波の被害かによっても大きく異なっていますし、驚くほど復興しつつある地域もあります。全体としてはまだまだ復興はその端緒に着いたばかりと言えるでしょう。広島空港に降り立つと、そののどかな空気に心底ほっとするのは、あちらでは知らず知らずのうちにがらばらう！という緊張感の

これからも、皆さんのご理解とご協力をお願いいたします。

中にいるからなのでしよう。帰るところのない人。を思い、心が痛みます。

今後も、石巻では仮設でのお茶会や手芸、ベースの一階での活動などが続きます。コーヒー豆(挽いたもの)やビーズなどが献品いただければ助かります。ただし事情は変化します。事前には必ずご一報ください。

これからも、被災地のためのご協力、よろしく。お願い致します。



石巻ベーススタッフ、中央、シスター山本

地区便り

岡山・鳥取地区

釜山教区への巡礼

玉野教会 岩城薫



釜山教区司教館前で集合写真

した。この殉教全体が祈りでした。行く先々でミサに与り、ロザリオの祈り、十字架の道行きと、神様の心と一致することでした。三姉妹教区の絆が深まりますように、召し出しが沢山ありますように、韓国殉教者の為にと。

指導司祭の金神父様と共に信者十四名で十一月十三日から七日間、巡礼に参加しました。関釜フェリーでゆっくりと時間をかけての船旅でした。私たちが訪問したのは、釜山カトリックセンター、神学校、南川教会、ピエタ修道院、殉教者金範禹聖地、金海教会、大邱の聖母堂、聖パウロ修道院、五輪台殉教記念会館。今回の巡礼の目的は祈りで

二月に行われる「ヨハネ・パウロ二世来広行事」は林尚志神父様(下関労働教育センター)を迎えて、ミサと講話を予定しています。

伯雲ブロック

バスで行く教会行事

松江教会 佐野卓司

伯雲ブロック(米子、松江、出雲の三教会で構成)では、交通機関の利便性が



ブロック勉強会(米子教会)

悪いため、昨秋の「永井隆博士追悼・平和祈念ミサ(雲南市)」、「前田司教様叙階式(広島市)」及び「ブロック勉強会(米子市)」に誰でも気軽に参加できるようにチャーターバスを用意した。当日は、いつもと違う場所・雰囲気の中で新鮮な気持ちでミサを捧げられたほか、移動中の車内では一緒にお祈りをしたり、おしゃべりをしたりとミニ旅行の気分も味わうことができ、ブロックの活性化や信徒間の交流拡大に大いに寄与できたと感じている。信徒からの要望もあり、今後この企画は続けるつもりである。

海峡かゝるの風 23

下関労働教育センターだより

林神父さんと郵便局の前で《ラグビー》をしたことがある。もっともボールではなく《署名》のパスだった。

一九九二年十月、戦時中に戦地のビルマで軍事郵便貯金をした慰安婦被害者の文玉珠さんが、貯金の返還を求めて下関郵便局に私たちと訪れた。私の手には返還運動を支持する全国一万四千百十一筆の署名があった。しかし郵政省側は、局内での面会と受け取りを拒否し、職員を配置して下関局の入り口を塞いだ。他の利用者は正面口より少し脇の出入り口を利用していった。押し問答の膠着状態の中、神父さんがその出入り口から「署名、こつちこつち」と叫ぶ。とつさに署名用紙が入った箱を神父さんに放り投げてパス。不意をつかれた職員の人垣が崩れ

て、私たち支援者は一気に局内になだれ込んだ。

この度、神父さんが『石が叫ぶ福音』という本を岩波書店から上梓した。内容についてはぜひ購入して読んで欲しい。一言いうと、署名のパスの話を書いたように、この本は《現場》を大切に、《現場》から福音を受け取り、そして《現場》に福音を還元してきた一人の司祭が、何を考え、行動してきたのが綴られている。石ころのように捨て置かれて来た《現場》には、福音がいつも叫ばれている。送料無料で本をお送りします。二六二五円。電話083-223-4585まで。収益は東ティモールのおばあちゃんたち、震災支援に寄付します。(細江教会・廣崎リュウ)



山口・島根地区

*養成関係

「第二バチカン公会議五十年周年特別講演」

二月十二日(日)、山口教会。九時半ミサ後、十二時四十五分頃まで。

講師・森一弘司教。

「祈りの体験」

一月十四日(土)、三月十七日(土)。地区事務局にて開催。

「信徒の神学」

二月二十五日(土)、二十六日(日)、宗像黙想の家にて修了研修。

*その他

一月八日(日)：「地区宣教司牧評議会」、地区事務局にて。

一月十五日(日)：「地区信徒使徒職協議会」、山口にて。

二月十一日(土)：「司祭・修道者大会」、山口にて。

二月十九日(日)：「平和アピール1981」

テーマ：ヨハネ・パウロ二世の視座から平和・震災復興支援・脱原発を考える」

担当：宇部小野田ブロック

時間：十時～十五時半

会場：サビエル高等学校

日程概略
一日程開始
九時半：受付開始
十時：ミサ
十一時：映画

「平和の巡礼者 ヨハネ・パウロ二世」

十三時半：分科会

①平和・憲法九条・歴史教科書問題について。

②東日本大震災の復興支援と被災地との交流について。

③脱原発・再生可能エネルギーについて。

十五時：全体会・閉会行事

十五時半：終了

山口島根地区大会

「あなたにとって新しい創造とは」

彦島教会 福永孝章

11月23日に表記の大会が山口県教育会館で開催されました。当日の参加者は約330名でした。大阪教区事務局長神田裕神父様の講演は「災害、新生、創造 宗教者として」というテーマであり、しんどい内容のお話になると覚悟していました。しかし、人と人との交わりに関するお話が主でした。やさしさや小さな気遣いが支えになるという内容で、震災のお話であるにもかかわらず、聞いていて、ほのぼのとし、不思議と元気になるお話でした。「私にとって新しい創造とは」のテーマでの5人の発表や2人の特別報告も元気が出る内容でした。感謝！



大阪教区事務局長 神田裕神父

J-CaRM(広島便)

もっと合同礼拝、国際的なミサを捧げたい・・・

呉教会 ジェロム神父

役割、即ちコーラスメンバー、ギターを弾くこと、侍者や聖書朗

日本のカトリック教会は特別に恵まれていると思う。日本人だけではなく、いろいろな国の信徒が数多くいるからだ。来日している信徒は仕事や勉強のかたわら日曜日のミサにもよく参加しているし、教会も外国から来て日本で生活する信徒を大切にしている。ある小教区では、外国から来た信徒が多くても、また日本語の能力が十分ではなくても、日本人の信徒と共に日本語のミサに参加することにしているし、他の小教区では、区別せずに、全ての国々の信徒が合同ミサに参加することになっている。

私は二〇〇八年以来 倉敷、呉、廿日市、東広島、三篠でいろいろの国籍の信徒と共に合同礼拝、国際的なミサを捧げてきた。研修生として日本に来たフィリピン出身の若者が多い呉教会を例にすると、彼ら自身がミサの色々なる

読などをしていて。ミサの聖歌はほとんど日本語と三つの英語だ。日本人の信徒は今では英語の栄光の賛歌を共に歌う。同じように、フィリピン出身の信徒は二つぐらいの日本語の拝領の聖歌を皆と一緒に歌うことができる。なぜなら、フィリピンのコーラスのメンバーはいつも日曜日のミサ後か、または土曜日の晩にも熱心に日本語の聖歌を練習しているから。このようなミサの聖歌のおかげで合同礼拝がもっと生き生きとしたものになっている。

こうして全ての国々の信徒が共に合同ミサに参加することによって、キリストの教会が一致し、一つであることを一般の社会に証をすることにもなる。(次号につづく)

青少年の活動

カトリック青年労働者連盟



はじめまして、私は日本 JOC 全国会長の久保木綾子と申します。今回は JOC の紹介をさせていただきます。と思います。

JOC (カトリック青年労働者連盟) は二十代の働いている、あるいは働こうとしている青年を対象としたグループです。JOC で

は『見る・判断・実行』のプロセスを大切にしています。職場での悩みや生活環境についてなど、自分のおかれている現状を仲間の目を通して客観的に見て、その先どう行動するか仲間の意見を参考に判断し、判断したことを日々の生活に持ち帰って実行していきま

成長を促しています。現在、JOC は札幌、東京、大阪にグループがあり、この度、新たに広島にグループを立ち上げようとしているところです。広島 JOC には既に少人数ではありますがですが仲間が集っています。興味のある方は、気軽にご連絡ください。仲間として一緒に成長していきましょう。連絡先・観音町教会 電話 082-231-5547



前田司教を囲んで、万葉杯集合写真

第一回万葉杯 ソフトボール大会

十一月三日、第一回万葉杯ソフトボール大会が福山の芦田川河川敷で行われました！

参加チームは岡山、福山、呉、玉野、鞆町、三篠、暁の星、そして今年は司教様率いる司祭団チームも参加し、全部で八チームでした。普段見られない神父様達の姿を見ることが出来た日となりました。



思うこと

山口教会主任司祭 イエズス会 加藤 信也 神父

ところです。

日本でも大家族は核家族と姿を変え、さらに個を重視する流れは、モンスターペアレンツなど「モンスター」と称される人々や、「無縁」とまで呼ばれる社会を生んでしまいました。

行きつく先が「無縁社会」であったとは、他者との関係性の中にしか生きられない人間にとっては恐ろしい

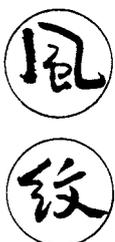
状況が生まれてしまったものです。

マルコ福音書三章には十二使徒の選定の場面があります。イエスが十二人を選んだ理由の第一に挙げられているのは「自分のそばに置くため」というものでした。

人は目的実現のために共同体をつくり、達成されればそれは消えていく。テニ

しよう。何にもまして大切な共同体でありながら、家族の目的は一言では言い表すことができせん。しいて言うならば「共にいるため」、ということになるのでしょうか。

十二使徒を選んだイエスの心には、家族のような共同体像があったのでしよう。教会が家族にも例えられる所以でもあります。二千年前のパレスチナで、イエスはすでに現代世界の状況を見据えていたよう



クリスマスと新年のお慶びを申しあげます。

教区広報では、司教メッセージ、教区内の取り組み・行事などの情報発信を教区報だけでなく教区ホームページでも行っておりま



<71>